

骨董集

卷之三

三
三
二

2134

善き徳をもちたり。三善為康朝臣の後拾遺後生傳
 かきもれままたおのゝのけりかきくはくら
 をまねんともはあゝねど。志ほくくそんて。これ
 まくありをたぐん日かその手たれそめあはうつてん。
 文化十二年乙亥九月二十五日

醒齋

骨董集上編後帙二卷目錄

下之卷本

- 毬杖きうじやう 一
- 粥木粥杖祝木あわのき、あつま、しんじ、いひ ちのたけ棒ぼう 四
- ひくろの名義なごう ひくろの假名かりな 六
- 離社りせつ 離合りあひ 八
- 古書こしょ 古書こしょ 離遊りゆう 九
- ひのふ衣ひのふえ 十二
- 室町家むろまちけ の比ひ 離圖りず 十五
- 三月三日みづのひ の離遊りゆう 十七
- 土離圖つちりず 二十
- 後の離のちのり 二十三
- 源氏物語げんじものがたり の離遊りゆう 九
- 古製こせい 離圖りず 十三
- 唐土たうど 鏝人いりる 十八
- 離使圖りしず 二十一
- 姬瓜ひめうり 離り 二十四
- 羽子板はこざい 三
- ね乳ねう 母日傘ははひがさ と云い 諺ことわざ 五
- 離遊りゆう の始はじめ 七
- ひのふれ調度てうど 十一
- 又また 十四
- 伊勢いせ 小米こめ 離り 十六
- 離繪櫃りえび 十九
- 離枕折敷圖りまくらせりしず 二十二
- ひのふ草ひのふくさ 二十五

江戸

醒齋輯



○毬杖

正月男童のりて持ふ毬杖いえ打毬の変風多るべし。打毬ハ馬上ニ武事をあらわすに
業よて和漢とも小其ある事いふ。此方の打毬を考ふる小萬葉集卷六神一龜
四一年正月。數王子及諸臣子等集於春日野而作打
毬之樂云云とあり。神龜ハ聖武天皇の年号也。古記をみれば
但書紀續紀後紀缺本續日本後紀三卷和元年五月の條云云「戊午按ニテ天ノ皇
仁明御武德殿令四衛府馳之種ヲ馬藝及打毬之態
帝之雜藝類云云打毬萬利リウキウカベツ別錄云打毬昔黃帝所
造本因兵勢而爲之同書雜藝具云毬杖打毬曲杖
也此の九の毬杖の事也唐土の黃帝の時始るといふことたりしやあらす

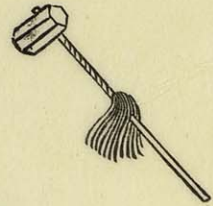
事物紀原三宋朝會要を引て云「毬杖非古蓋唐世尚之以資
玩樂」又云唐の時盛ん。聖武天皇の御時ハ唐の玄宗の時よ
むくれハ打毬のおこるけれ。和漢同時とりべし。○唐の僖宗ま殊よことをも
好めり。僖宗帝ハ御國の貞觀仁和の比あされし。○遼れう小それを善擊者
あそびと遼史卷百蓋臣傳下「耶律塔不也。以善擊鞫幸
於上凡馳騁鞫不離杖」とええたり。淵鑑類函卷三百巧藝部八よ
打毬の古事あらびし。詩篇歌をのまて戒たれどそのまわつらりけれ
らふあ毬。○さく打毬より變り別れて毬杖と稱一種の玩具あるまじ
ひけれの此より詳あらざ其まじりハ宇都保物語小ええたり。中比の物よ
ええし。源平盛衰記卷三十よ云「法師の首を造て毬打の玉を打か如く杖を以て
わら打くら打蹴たり踏たる様と小あたり大衆兒共態と此玉ある物をと問ハ
是ハ當時サノ用え給ふ太政入道の首也」と答。平家物語卷文覺上人

骨董上編 下之前一

のり〜あれど、昔のどく、毬杖の推、つらひ、竹、ま竹、ほき、のたひ、ひよ、を打、とる

寛文六年印本
訓蒙圖彙 羽載

○近古制毬杖畵



手しづみ
まき

和漢三才畵會 卷十七 嬉戲部も如此古
制の畵を却て云「按毬打之遊戯和漢共
其求尚矣近世惟小兒爲戲每正月與
破魔弓同手之猶近世不用之故本式
毬杖見者希」此畵を編し時正徳三年か
それバ古制の當時とらるる者希と今の
制のどくにありするべしとら今の制ハハ
むひえ祿以後の物とあもなる。

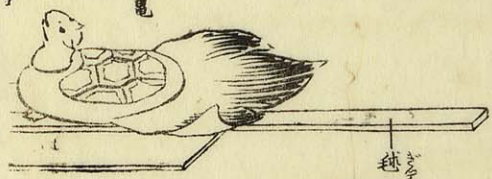
○京ある青本庵主人云今京師の俗小兒男女生きて初の正月母方の親里
あどより左の畵制のどく毬杖をかうりて祝儀とを、は何の所用もあくた

とを、まきと小児の目をまぐさむるの、次、の年の正月ハ男児うたふりてを
かうり、女児ハ飾花をかうり。醒まらう花とらりの宝曆の前のし、
毛筆のかくと物、小児三歳を、いとむる。但此事あてとらるものらと、
まきの去の希、とらるもの、
不用もあくた、年始の祝のむ、物、と、

○今制毬杖畵

推、
曲尺一尺八寸許
土をつ、紙を、胡粉、丹、
か、粗糲、

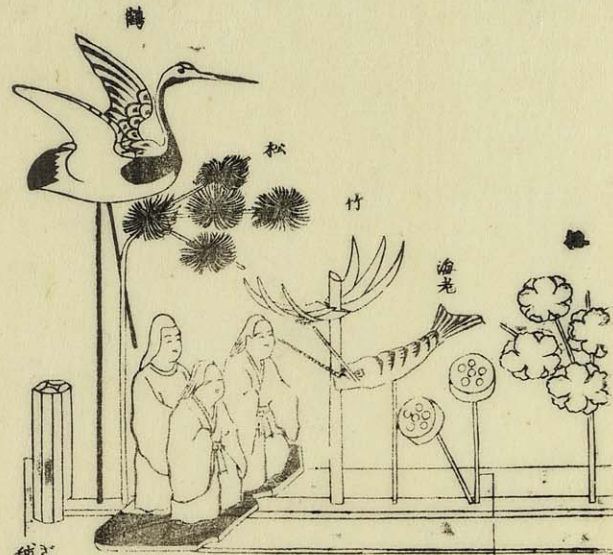
滑稽雜談 卷之一、
當世の
幼兒、紙を、
紙上、又ハ、



毬杖の
推の柄

月童上編 下之前四

板は貽一鶴亀松竹の造
 移しとらるるをみらば此書
 百徳三和漢三才面會と同
 標は昔時よりこれに徳の取
 まるる今の世制よりしるべ



鶴の杖の
 玉の
 扇と松の
 人形
 羊徳神
 杖の
 杖の

これ京師の人八月多れ
 昔より東国よりこれ
 の多れはくに其身を
 ちりしつづるよきと
 ちりしつづるよきと

① ぬまぐべ

ぐりぐりの名は古き書よいまごんりららむ近き昔造り始ちる物あるべ。毬杖と
 同物とるへひがらこへえ来別物之本草啓蒙 卷廿一 云「祿禱ハ田器あり。秋此の
 如うして六稜あり。兩頭は索あり。土上をひれて地面を平よる具あり。三才
 畜會 授時通考等よ畜を戒む。 本邦正月兒戲のふるいこの形は家
 あり醒 云今此説よりよく按ふ正月男兒小ぶらぐをりそのをせり。年始は農
 業のよむびをさせ農事をせむる意あるべ。古画をみる小ぶらぐは紐をつけて
 地上をひく体をかやく画けり。是田畑の地面を平よるのまねなり。明王圻が三
 才畜會を考ふる。礮礮ハ長さ三尺むろと大小等くらべ。或ハ木或ハ石をりてはくま
 畜力を用て田疇の土を打。水陸通して用之とされ。馬把のちく牛馬の尻小はけを
 りらる物あるべ。〇ぐりぐりの制作を考ふる。兩脇につけたる戸車の如きりのハえ
 地をひく料の車とすのじあるべ。ちるるを後よ毬杖とす。ひその車をとる。後ちるる

投る玉と。かきくくの紐を持てうりぬら。推のうりうと。玉を打とわ。ひまひ。
秘杖とある。物のまににすし欲たよのらつを明。曆万治の比の古高を見んて推
當小さあり。前よとるごう。今の年始の祝のまの物よとるの。竹の所用も
あさりのとあれ。左よ出と高をてん考へ母りべ。

○羽子板

正月あつひ女児めわいのりくのを。羽子板の始詳あらど。按るよ。下学集「羽子板正月」
かくのびく。あぶあをつけり。前よとるごう。下学集の文安元年の各ある。羽子板の
今文化十年より。あつと二百七十年より。前よとるごう。物よ。その前のひつれの比のり。故
つらど。搥搥裏鈔卷六。爆竹の條。羽子板と云名のを載たり。前よとるごう。世諺問答
天文十三
年ノ書上の巻よ「向て云。をさあれたららの。さひつた。ゆのりある
る。答。されのささあたり。の。蚊よ。られぬま。あひひりあり。秋の。ゆ。蜻
蛉せうりゅうの。虫むし生なま。て。の。蚊を。ど。ろ。ろ。物。ま。ま。の。さ。の。さ。ひ。の。本蓮子。あ。ど。と。ん。が。う。
か。ら。ま。と。の。を。は。け。た。り。を。板。ま。つ。ま。の。れ。が。あ。つ。る。時。ら。ん。が。う。ご。う。の。

中。あり。ご。蚊をか。それ。めんた。り。ご。ご。の。こと。と。は。ま。の。り。林逸節用

集明心ノ羽子板。胡鬼板子とあり。日次紀事延宝四。正月の條。云

那兒擊毬杖一玩弓矢二女子動羽子木板一弄二絲三毬云々又

十二月市中の賣物をあらとる。処。毬。及。毬杖。部。里。く。羽。古。義

板」とわれ。胡鬼板。小作。の。借。字。よ。羽子木板の上。畧。吹。羽子。の。こ。を。胡鬼の

子。の。よ。も。板。の。方。よ。の。れ。た。る。名。吹。も。あ。も。ら。れ。ど。下学集。吹。の。古。書。小。羽子板

胡鬼板とわれ。後の日次紀事を證として。決。ご。あ。古。書。を。た。の。ぬ。べ。

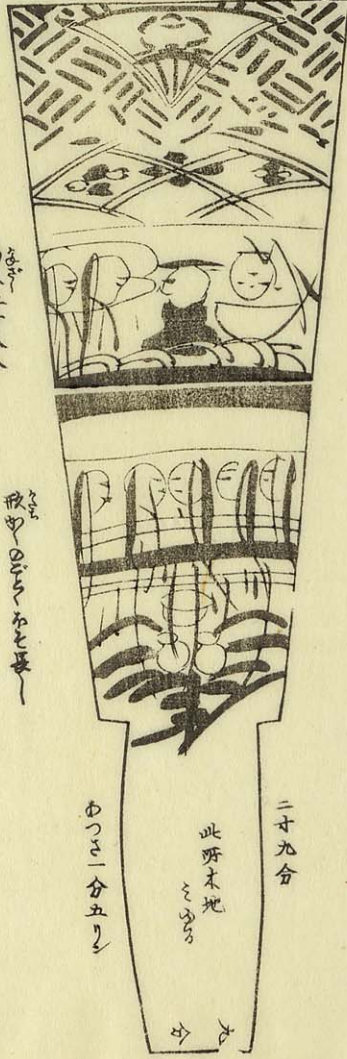
○さく私可多曲万治二年印本。田舎人京のちりて。ご。の。持。め。の。勢。を。と。て。羽子板。ま。や

あ。ん。と。い。ひ。笑。話。を。載。た。り。に。に。古。制。の。羽子板。の。勢。よ。似。た。ら。ん。今。の。の。勢。よ

ち。ん。は。べ。た。形。よ。の。と。か。め。ひ。三。春。羽子板。と。い。ふ。と。ん。ま。よ。い。つ。も。勢。よ。似。た。さ。べ

其古制のあら。ある。を。た。れ。に。に。せ。高。を。と。る。べ。

○此蒙山日光寺の外講明の高山よ。あ。ち。の。水。の。子。を。つ。つ。と。又。こ。の。こ。の。も。玩。具。の。羽。子。の。形
の。似。く。の。こ。の。名。を。蒙。山。あ。ら。た。ら。ん。と。い。ふ。と。ん。ま。



曲尺五寸八分

板中のところを長

二十九分
此野木地
わつさ一分五厘

滑董上編下之用八

○羽子板古制

これ奥列の春のうらうらり傳はる古制ありし
前作管素うらうらりを雅なり裏の五波に
鶴をのりし粗造りなしたる
本地の胡粉をぬり墨丹緑青ホコをいれどれど



扇管の比印行
休みの

扇管四年印行
京蓮

○おりのをりく持ふ古制を
しりあつらんくしりあつらん
しりあつらんくしりあつらん

寛政五年印行
日本歳時記



玉川
くしりあつらんくしりあつらん

万治三年印行

世時問答
此言を以て継柱と云ふこと別

老練問答の元文の
古書多れども此は
上本の時
當時の
ものを
りれたる
の比の證と
たふさく

くしりあつらん

くしりあつらん

物よええーの下組四。「十月朔の杖よく打ヒトぶる勅禁中今も朔杖よく

女房をうて男あん子をなま生なまむとてうてなま越前なまあといはらへなまきとあり。本文ハ

不知也天正十八年 貞享五刻 正月十五日の條なまよなま云「今日朔杖と

松枝なま柴なまあといはらへなま女なまの腰なまをなまうなまむなままなまあなまひなまとなま今なまもなまさなまるなまひなまあり。但

今なまのなま小なま兒なまのなま戲なま事なまとなまありなまとなま云なま。此なま國なまのなま松なまのなま枝なまをなま五なま色なまよなまりなまとなまりなまてなまぞなまとなまよなまと

女なまをなま打なま河なまあり。西なま國なまのなま棒なまよくなま女なまをなまうなまつなま河なまありなま。云なま。同なま次なま紀なま事なま追なま加なま云なま。信なま飛なまニ

等なまのなま圓なまよなま於なまてなま。漆なま膠なま木なまをなま以なまてなま。其なま長なまサなま一なま尺なまニなまサなま許なま切なま上なま下なまよりなま削なま掛なまてなま先なまの

方なまよなま左なま卷なま板なま或なまハなま柳なま櫻なま花なまのなま如なまきなま物なまをなま紙なまよなま切なま粘なまとなま松なま煙なまをなま以なまてなま是なまをなま煙なま

其なま板なまをなま取なま除なまハなま其なま摸なま様なま白なま残なまるなま。是なまをなま号なまてなま淨なま祝なま棒なまとなま云なま。新なま婦なまのなま家なま毎なまよなま入なま

てなま新なま婦なまのなま腰なまをなま打なま。児なま童なまのなま戲なま也なま。云なま。此なま記なまのなま延なま室なま貞なま享なまのなまのなまゆなまひなまのなま著なま述なます。

造なまぶなま。明なま朝なまもなま心なまもなまきなまとなまえなまりなまるなまや。日本なま風なま土なま記なま卷なま之なま二なま時なま令なまのなま條なまよなま云

元なま宵なま 正月なま十五なま。云なま。但なま街なま道なま郷なま村なま。兒なま童なま。年なま及なま二十なま五なま十なま八なま

丸なま已なま上なま者なま。各なま取なま柳なま枝なま去なま皮なま彫なま成なま木なま刀なま。杖なまをなま木なまカなまとなま以なまレなま皮なま復なま

外なま纏なま于なま刀なま上なま。用なまレなま火なま燒なま黒なま皮なま以なま分なま黒なま白なま之なま花なま。此なま説なま本なまのなま日なま次なま紀なま事なま

名なま曰なま。荷なま花なま蘭なま密なま。再なま取なま前なま棘なま之なま條なま挿なま供なま香なま火なま神なま前なま。

次なま集なま各なま童なま手なま執なま木なま刀なま隊なま闘なま于なま途なま。丸なま有なま替なま久なま無なま子なま之なま婦なま。

將なま木なま刀なま通なま身なま打なまレなま之なま口なま念なま荷なま花なま闌なま密なま。使なま此なま婦なま當なま年なま有なま

孕なま生なま男なま。云なま。となまえなまえなまたなま。此なま方なまのなま明なま入なま此なま方なまのなま字なま傳なまへなまてなまるなま。皆なまあなまりなま。〇なまのなまいなまふなまいなまふなま。婦

八なま美なま草なま 貞なま享なま三なま年なま 全なま洲なま共なま制なま日本なま風なま土なま記なまをなま一なま層なまのなま紗なまとなまもなまらなまのなまとなま云なま。二なま書なまのなま名なまをなまはなま藤なま園なま日なま記なまのなまかなまりなまとなま云なま。

雷なま盆なま槌なまのなまごなまらなまるなま丸なま本なまになま鶴なま龜なま松なま竹なま室なまづなまのなま繪なまをなま彩なま色なま幼なま男なまども。

いなままなま産なませなまぬなま新なま婦なまをなま打なま祝なまひなまありなま。書なま言なま字なま考なま 柯なまツなま枝なま。北なま越なま人なま

謂なま之なま杖なま木なま 年なま中なま風なま俗なま考なま 貞なま享なま四なま年なま印なま 本なま上なまのなま卷なま 正なま月なま十なま五なま日なまのなま所なま云なま。乃なまのなまこのなま事なま。

大なまのなま子なまとなま云なま義なま也なま。陰なま相なまをなま作なまりなまてなま。童なま童なまのなまりなまてなまをなまびなまとなまてなま女なまをなま祝なましてなま大なまの

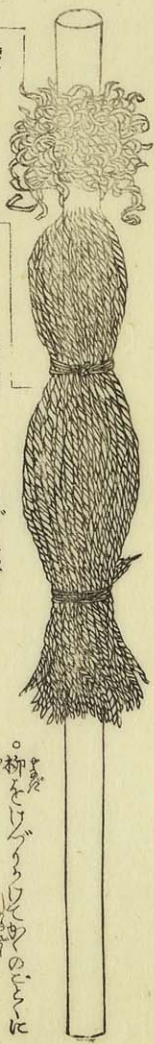
そのなま子なまをなま持なまたなままなまとなま云なま義なま也なま 年なま中なま政なま事なま要なま言なま 貞なま享なま三なま年なま 印なま本なま卷なま二なま 云なま。美なま濃なま園なま沐なま官なまの

骨なま董なま上なま編なま下なま之なま前なま十なま

骨董上編下之前十

○赤いだけ棒の音 又祝儀棒しものみ

これの羽列よりへりうりて造る杖也。毎年正月十五日道祖神のまつりとて、
 のりいられを杖を祝儀とす。むりひ女の腰を打りしを
 されも杖の遺風也。正月十五日軒よほる。けりりむしと云りの考。別あり。中編
 似たり。○それよつとて正月十五日軒よほる。けりりむしと云りの考。別あり。中編
 裁をいへ



○か乳母日傘 せりの誘 五

今の世の平たぬの人よりとるよか乳母日傘よととらなるおどろひ誘あり。昔り乳母
 きりつりあとのあつるべた者の思ふよか日傘をさうりりさたるおどろひ誘あり。昔り乳母
 さら舟青りてさぬの後をむしととに菱川が後よあつてええて。延宝天和貞享の比

のららひたりとれ進んせまものりかふらなえて傍よのものことなり

○か乳母日傘と
りか誘のり

これの介へりうりて百七十年たり

前寛永のころの縁也。
 荷の民の女の質素の
 風八今の田舎の女よ
 あつたはられると
 いふ画也
 みるべ

河津授美甲



承応明暦の比まじり
 女の髪心のごとくひびたり
 承応明暦の比まじり
 女の髪心のごとくひびたり

○元禄十一年印本
 尾形信が
 わける後のうらまは書あり



按るよわりのごころ
 進子様ひのまろが成
 御ふまははまきよも多し
 立辨ひのまろごひひ一丸
 今もひをさるごひひの丸
 まておをさるあうをたろふ
 じとそれとハ跳あるべ

○寛延二年印本
 雛提の記と載る
 柱ひつゝの畵



このひつゝの畵
 まつを雛の
 雛ひつゝのひ
 たり

○享保十七年印本
 女中風俗五鏡
 載る畵々當時の
 ひのごころごころ
 一段をまじけり



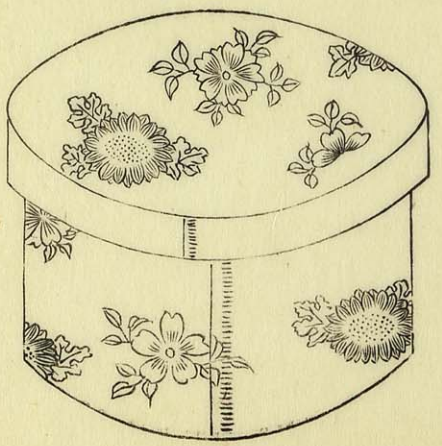
ひごころ
 ちごころ
 ちごころ
 ちごころ

諸国奇遊談 寛政十一年刻
 今も洛北の村里より三月の節もどよ

必用ふ予が幼時ころ
 用ひゆ多二月の末の賣ゆりきこと
 あり今いたえてんあらど今畵
 どの遠國又洛北の今の形を
 らふみるに」といひて此畵を生ぜり。

○醒 按るよ此はひつゝの櫻と菊を

わけるに三月のひのと九月の後のひもと
 うたの縁あるべしとれ邊世の制あれいふ



晋董上編 下之前子画

○享保の比の土雜齋 三十一



尚志堂所藏



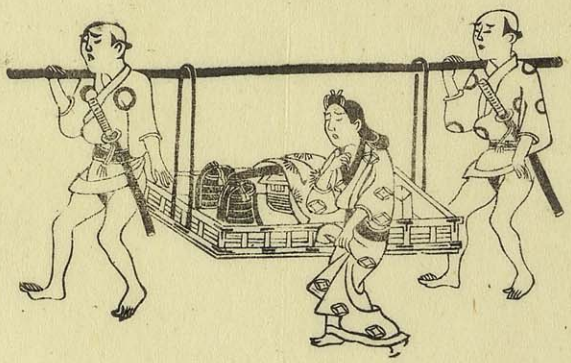
是て土をりてはくを焼て胡粉丹緑青
 までとてのうとがあのがううな色なり
 かんて享保前後の物とせん色
 際草かき取りのわんしん
 びりの質をよと
 えるにたれり
 ワキヤウ
 今も俗草
 まで土の
 内裏ひきと
 つる野舎
 ころとれと
 りんふ
 こそ

今も田舎の女子はこれとて三月の節は江戸の今戸焼の土びなをのびをかきりて
 祝ふ。とくに古俗の田舎のそれなり。異列の田舎も土びなをのびらんとせん。

○離使齋 三十二

その離使としてのありては、食事をとる人
 のうの諸道具をわたり、草餅を
 ひきののり、入離を揚入、小、蛤ホを
 入、節の礼としてひきを、祭物よのビ
 持、不の持せ、親類、悉くつらとせ、是
 成人の時、入、世帯持の誓古、あり。
 當分のあそびにあつて、わつらること此齋よ
 くのつり、ひきのつらひとのひの、は、こ
 中の、長より、おま、おま、のり、こ、と、あ、べ、
 ひ、の、離、ま、あ、ま、さ、け、と、ら、ひ、た、り、今、も、あ、ま、
 ま、い、節、白、あ、ま、さ、け、と、ら、ひ、た、り、今、も、あ、ま、
 だ、い、本、朝、食、盤、元、祿、八、撰、白、酒、云、こ、
 後、俗、三、月、三、日、為、節、物、供、離、
 祭、と、あ、れ、その、物、も、日、酒、を、用、ひ、た、り、
 元、祿、十、八、年、印、行、
 離、齋、日、本、国、

○天和貞享の比、菱川所宣がむける
 車中、行車の印本、此齋あり



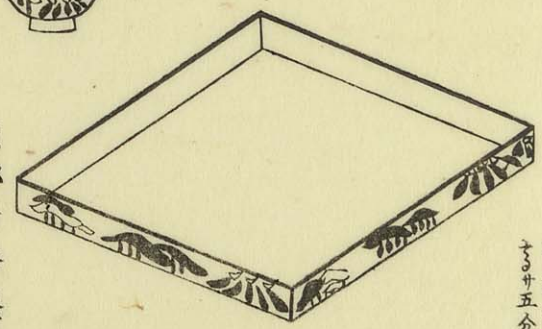
骨董上編 下二節三五

おも 眞海まみき 愛あいの 上うへの のり かつま
 竹白 雛ひなの つひの 酒さけの 弱よわ足 布ぬい垂

○ 雛 枕 折敷 圖 三十三

え 挽物ひたものの 本地まぢあり。折敷ひきは 片木へぎの
 さいのめつさりのうと粗せ糞くそよけくまう。
 られも本地まぢあり。丹に緑りく青せいよと。松竹しょうちくの
 後のちの。京みやこ師しの 明あき和わ女に永えいの 比ひ
 まをのりし。法ほつひつと
 かい。古ふる物ものもとをあらぬ。
 まつそ 簀すい葉はそとくく 雅みやび致いたあり

枕まくらき 一分いちぶ余あ
 五分ごぶん
 五ご分ぶん
 三さん分ぶん



京都きょうと 音ね李り庵あん藏ざう

折敷ひき方かた三寸さんすん三さん分ぶん

○ 後の雛 三十三

後の雛のちのひなの 事こと古ふるき物ものよいまごえあさる。元もと禄ろく以後いごの 事ことあへー 滑なめ管くだ雜ざつ談だん
 正せい徳とく三さん 卷まき十七じゅうしちよ云い「後の雛のちのひな 九月くわがつ九く日にち 和わ国こくの 女に兒ごひる 拵あそびびを ちとせり古ふるき
 年とし撰せん 物もの拵あそびも ちとせり。上うへ巳みの 節ふしは 拵あそびめり。三月さんがつの 部ぶは 記あやせ。今いま又また九く月げつ九く日にちよ
 賞しょうする 女に兒ご多おほく。云い。俳諧はいかい是これを 名な付づて 後のちの 雛ひなとせ。其その上うへ巳みは 對たいして 謂いふ。こ
 晋しん子し十七じゅうしち回かい 年とし刻こく 一いち物ものの 占うらみとせり。後のちの 雛ひなとせり。附つ合あひの 句くあり。されば
 正せい徳とく享きやう保ほ八はちの 比ひりとせり。今いま由よし京みやこ大だい坂さかあどよりの。うへり。あれど。三月さんがつの
 如ごとく。ちとせり。雛ひなを 一いちツニツ出でて。ちとせり。それ。も。あ。て。り。あ。ら。せ。り。と。い。ふ。
 吾われ山やまが 朱しゆひる。ま。さ。よ。ひ。ご。の。塚うづみも。の。の。う。へ。り。え。え。たり。○ 播は刺し室むろの 辺へ。八はち朔げつよ
 の。ま。を。立たてる。所ところの。り。と。或ある人ひとの。り。と。其その。実まこと。吾われの。あ。ら。せ。り。

○ 姫氏ひめうぢの雛ひな 三十四

振ひら丸まるの 漢かん名なを 金きん鷲じゆ蛋だんと。り。の 形かたち鷲じゆの 卵たまごよ。似よた。れ。り。元もと禄ろくの 後のち女に兒ご